

0 email t-hatsu@tokyo-np.co.jp

ト発

関 東大震災後、旧東京市が建てた百十七の「復興小学校」。頑丈なつくりや白亜の外観は、帝都再生のシンボルだった。現存する校舎は、ほかの施設に転用されたものも含め、わずか二十。そのうち九校舎が集積する中央区が、数年内に三校舎を取り壊すことを決め波紋が広がっている。

築80年 帝都再生のシンボル

円柱に挟まれた玄関扉を開けると、高々とした天井。窓にはステンドグラス。木の手すりがついた階段は、ゆるやかなカーブを描く。

明治時代の外国人居留地跡に立つ区立明石小学校。震災から三年後の一九二六(大正十五)年に完成した。聖路加国際病院の隣だったために空襲を逃れた。終戦直後は、米軍に病院とともに接収されて、軍医の宿泊施設に使われた歴史もある。

八十年以上の風雪に耐えてきたが、建て替えに向け、来年から解体が始まる。区教委は「都心回帰で、教室が不足する恐れがある。老朽化で、多様な学習形態に対応できない」と説明する。同じ理由で、学区が近接する明正(二七年完成)、中央(二九年)の二つの復興小も建て替える。計百三十五億円の予算を見込む。

復興小は、外観デザインこそ違つものの、教育環境の平等を理念に、統一した規格で建てられている。戦後、全国に広がる鉄筋校舎の先駆けだ。三校とも、耐震性は現在の基準でも問題はない。保存を求める声も上がる。

明石小PTA役員の男性は「子どもが『僕の学校なくなるの...』と泣いた。使える建物を壊すのはおかしい」と話す。

復興小学校 なくなるの？



①採光や風通しも配慮し、「U」の字形で統一されている「本社ヘリ」わかづる「から」
②円形の大きな窓
③高い天井、いずれも明石小学校で
④曲面が特徴的な外観「明正小学校で」

中央区、3校舎解体へ

早稲田大学講師「都市計画」の川西崇行さんも「三校は、地域の顔となる景観をつくってきた。グラシックススクール」として個性をPRすれば、学校の価値も上がる」と話す。区は、ほかにも八重洲にある城東小(二九年)について「東京駅前のまちづくりと連携した」改築を検討中だ。

城東小の前身、旧京橋昭和尋常小を卒業した千葉市川市の杉江(旧姓茂子さん)は、教室の窓から日本橋の白木屋の火災を見ていた思い出がある。区の検討を知った二年前、卒業から七十二年ぶりに母校を訪ねた。その瞬間「夢を見た階段。どこだか分からなかったのが、ここだった」と記憶がよみがえった。「先生も生徒も、立派な学校が自慢だった。いいものは残さないといけない」区は、同じ復興小でも、銀座の泰明小(二九年)と日本橋の常盤小(同)の有名小については「観光資源でもある。保存の手法を検討する」としている。

文・浅田晃弘／写真・梅津忠之、朝倉豊 紙面構成・杉山真一

文化的価値の継承を

藤岡洋保・東工大教授(建築史)の話 良好な教育環境を整えるという東京市の高い理想に基づき、当時の日本で最高レベルのプランや構造が実施された、高く評価できる建築。コスト軽減のためにも、既存の価値を生かして、使い続けることが考えられてよい。公共資産の文化的価値の継承は、行政の重要な役割の一つだ。